

日本語補習授業校運営の課題



「パリ日本語補習校」の音読発表会に備えた授業

在仏日本人会
会長 浦田良一

増える日本語補習校通学者

私は「パリ日本語補習校」の運営に深く関わりあって11年目になるが、42年前初めてパリに赴任した当時と比べると、海外における日本人家庭を取り巻く教育環境は大きく変化した。日本企業の海外進出が大都市周辺とは限らなくなってきた、日本人が住む場所が広がったこともある。日本人学校があっても現地校に通わせ、土曜日には日本語補習授業校に通わせる日本人家庭が増えてきたことや、国際結婚が増えて永住型の家族が増えてきたことにより、補習授業校へ通う生徒数が増加してきたからだ。

特にアメリカやイギリスのような英語圏ではその傾向が顕著で、補習授業校に通う生徒数は日本人学校に通う生徒数をはるかに上回っている。アメリカでは2万4000人の義務教育対象者のうち1万3000人(53%)が補習授業校に通っている。欧州でも1万4000人のうち、補習授業校に通う生徒は3900人で、日本人学校への2600人を上回っている。これらの数字から、欧州では日本人学校へも補習授業校にも通っていない生徒が約50%いることにも気がつく。

経験不足で苦心した初期補習校

今のパリ日本語補習校は日本人学校よりも6年前に誕生していて、定評のあった私立の補習授業校を基としている。経営者の逝去後ほどなく廃校になるのを知らされた保護者たちから、2006年初頭に日本人会に運営の継承依頼があり誕生し

た。前の補習授業校の大半の生徒と2人の教員を引き継ぎ補充の教員を採用し、教室は新たに区民会館を借りることにして同年9月にスタートした。1年くらいして徐々に生徒数も増えて100人になろうかという頃に、当時の領事から「これくらいの規模になると、文部科学省に補助金申請をされたらいいですよ」とのアドバイスがあり手続きをし、08年9月から補助金をもらえるようになった。と同時に補習校の関係者(教員、保護者)以外の第三者も含めた委員による運営委員会の設置と、年次報告書を義務付けられた。

しかし、それから約2年間運営委員会は紛糾の連続、延々5時間に及ぶこともあった。激高してテーブルを叩きながら抗議をする過激なママさん委員らがいて、非現実的な要求や教員の資格にクレームをつけたりしたためだ。教員間にもあつれきが生じ、多くの保護者も落ち着かない不安な状態がしばらく続いた。

紛糾のもとには我々が(私が)経験不足で、ごく一部の過激な人たちに自信を持って対応しきれなかった曖昧あいまいさにあったのだった。トラブルの1つの要因であった教員や、その縁故関係からの採用寸前の教員を断ったりする一方で、公募した多くの志願者から有能な人たちを相次いで採用し、教員間の不協和音を取り除いてから、改善が顕著に進んだ。日本での教壇歴がある彼女らからは、「日本のモンスターペアレンツと同じですよ。言わせておけばいいのです」との心休まるアドバイスもあった。後日知ったことだが、彼女たちも一部の保護者たちから、上から目線で糾弾されたことが